

慢驚風の藥ニ用云、

〔草木育種後編下品〕蔓陀羅花草本

花戸にて朝鮮朝貌といふ、和蘭にてドル、アツプルといふ、春分に實を蒔てよし、度々糞水魚腥血水を澆ぎ、漸長じて花實あり、實をとり藥用とすべし、之を多服すれば昏睡するに至る、容易に口中に入る事なかれ、

〔浚明院殿御實紀附録二〕弘福寺のほとりを過させ玉ふことのありしに、その邊の村長中田彦右衛門といへる翁、なにかして御こゝろに應ずるばかりのこと設て、御覽に備むとて、夏菊の花と曼陀羅花とを寺内に植置て見せ奉りしかば、めで興じ玉ひ、曼陀羅花は實一つ摘てもちかへらせ玉ひしかば、彼邊の者どもいと有がたく忝き事に申傳へたり、何事もわざとこゝろを用ひ設たることは、かりそめにはせさせ玉はずといへり、これよりして曼陀羅花は、江戸にもてはやすことゝなれりしとぞ、

〔採藥使記中總州〕重康曰、此比總州ニテアル寺ニ一宿セシニ、十五六歳ノ沙彌、戯レニ曼陀羅花ノ實ヲ食ヒケルガ、卒ニ發熱シ、譫語シテ狂人ノ如クニテ有リシニ、色々藥ナド用ヒケレドモ、暫ク癒ヘズ、一夜煩ヒ翌朝瀉下シテヨリ平愈セリ、誠ニ本艸ニ毒草ノ部ニ入タルモムベナリ、此所ニテハ木アサガホト云フ、江戸ニテ朝鮮アサガホ又チャメラ草トモ云フ、